

D. W. Harding の 'Regulated Hatred:
An Aspect of the Work of Jane Austen' をめぐつて

久 米 清

I

最近目を通したいいくつかの Austen 論の中で、とりわけ興味深く思つたのは、D.W. Harding の、'Regulated Hatred: An Aspect of the Work of Jane Austen,' (*Scrutiny*, March, 1940.) であります。この paper を読んで感じたことを中心に二、三述べたいと思いますので、便宜上、まずこの内容の紹介から始めたいと思います。

Harding は Austen の一般的な印象がどのようなものであるか、というところから始めます。Austen は sensitive な人のために 'refuge' を供給するとか、Beatrice Kean Seymour の Austen についての言葉、'sence of relief and thankfulness' とか、'gentler virtues of a civilized social order' を述べているとかいつた考え方が従来の Austen 論であり、これは 'serious misleading impression' で、'こういつたものはすべて私に彼女の作品を読みたくなないと確信させるに充分だ、'と相当はつきりしたことを云つております。(以上 Pp. 346-347)。

では彼は Austen をどのように読んだかといひますと、例えば、*Northanger Abbey* の Henry Tilney のなにげない言葉の中で 'Where every man is surrounded by a neighbourhood of voluntary spies' という箇所特に注目し、こゝには 'touch of paranoia' が見られるといひます。(p. 348) また *Emma* における、Miss

Bates についての説明、'she had no intellectual superiority to make atonement to herself, or frighten those who might hate her into out-

ward respect.' にも注意し、結局、'日常の社会生活の関係へのこの fear と hatred の爆発' があると要約し、Austen の目的が 'desperate' なものであるとさえ云つています。しかし Austen はそのような対人関係における hatred をそのままぶちまけはしません。そのような人たちともうまくやつていきたいとも考えるわけです。(pp. 350-351) 何故なら 'いやな奴とも没交渉ではありえない' からです。(p. 354) だから hatred は regulate されねばならないのです。以上が前半で、後半は、Austen の作品の 'fairy-tale theme' に言及し、それは、'the Cinderella theme' と 'the founding princess theme' だといひ、後者については、'価値のない親に育てられながら、彼女の生得のものである delicate sensibilities を失つていない Princess' というテーマと説明しております。このようなテーマが Austen の前期の三つの作品においては特に単純に扱われており、ヒロインは Cinderella であり、作者の criterion を持ち、社会の一般道徳に屈しません。しかし後期になると、ヒロインでさえも、周囲の人や情況と無関係ではありえないし、時にはその欠陥をもつたものとして描かれている、とします。(pp. 355-361) このように後半においても、周囲の人々と無関係ではないし、無関係では生きれないヒロインを描くことによつて、そのような作者自身の思想が hatred を持ちながら、それを regulate しなければならぬゆえんを説明しています。

II

以上が Harding の Austen 論ですが、こ

れを讀んだ時すぐに頭に浮かんだのは、
 Marvin Mudrick の *Jane Austen, Irony
 as Defense and Discovery*
 (Princeton University Press, 1952)
 です。Mudrick はその題目からもうかがわ
 れるように、Austen の主調を Irony と考え
 Irony に Defense と Discovery の二つ
 の働きがあるとします。前者は消極面で、自
 分の思想をあからさまに出さず、'主題から
 も読者からも Distance' をもうけ、最終的
 には、物質を基調とする社会の convention
 に従うことを意味しますが、後者は積極面
 で、'interpreter of life' として、社
 会の 'incongruities' を抽出する働きをさ
 します。(以上 p. 1-3) このような Mud-
 rick の考えと Harding の考えとは狙いと
 する所はもちろん、細部にわたれば、いろ
 ろと違つた点が出てくるでしょうが、発想の
 大筋の所で非常に類似した一点をもつてお
 ります。それはなにかと申しますと、二人とも
 Austen が非常に人間関係を気にし、世間一
 般の非難を恐れさえすると考えている点で
 あります。そこから Harding の場合は、Aus-
 ten は対人関係のいやらしさ、すごさに時に
 は fear や hatred を抱き、しかも同じ世間
 への恐れから、そのような hatred を抱きな
 がら、ぶちまけることが出来ず、regulate
 しなければならなかつたと考えますし、Mud-
 rick によれば、Austen は、社会のいやら
 しさ convention を discovery しなから
 世間を恐れて defense するというわけです。
 このように両者の間に類似の点があるのは、
 Mudrick がその著書の冒頭に、Harding の
 このペーパーの一節を引用している所からみ
 ても、たんなる偶然ではないと考えられます。

Dorothy Van Ghent の *The English
 Novel, form and function* (New Yo-
 rk, Holt, Rinehart and Winston,
 1953) の中の *Pride and Prejudice* 論の
 中に次のような一節があります。

... What Jane Austen does is to

dissect - with what one critic
 has called "regulated hatred"
 - the monster in the skin of
 the civilized animal, the ir-
 rational acting in the costumes
 and on the stage of the ration-
 al; and to illuminate the dif-
 ficult and delicate reconcili-
 ation of the sensitively de-
 veloped individual with the
 terms of his social existence.
 (p. 100)

このように Ghent は Harding のこのペ
 ーパーに言及し、Harding の 'regulated
 hatred' という言葉を自分の論の補強に使
 つております。つまり Ghent も Harding
 の考えと対立するものではなく、この引用箇
 所からだけでも類推できるかと思うのです。Austen
 をたんに gentle とは考えず、the
 compression between a barbaric
 subsurface marital warfare and a
 surface of polite manners and civ-
 ilized conventions (p. 101) をみ
 つめる批判者と考えます。そして Harding
 の regulate にあたるものは Ghent の場合
 は 'reconciliation' (p. 103) であります。

その他、例えば、Louis Cazamian は
A History of English Literature
 (London, J.M. Dent and Sons Ltd) の
 中の Austen を論じた箇所、'unmerci-
 fully severe' (p. 965) という鋭い言葉
 を使つており、さらに、'The secret com-
 plexities of self-love, the many
 vanities, the imperceptible quiv-
 erings of selfishness' (p. 965) と
 いうことを云つており、こゝには Harding
 の hatred に通じるものがあるように思われ
 ます。もちろん Cazamian は Austen のそ
 のような面を強調しているわけではなく、例
 えば、'gentle tolerance' (p. 965) と
 いうことをも云つていますが、この tolera-

nce も Ghent の reconciliation, Harding の regulate に通じるもののように思われます。

また Arnold Kettle は *An Introduction to the English Novel* (Hutchinson's University Library, 1954) の第二巻の中の *Emma* を論じている章の一節で、

... If, in whatever century she happened to live, Jane Austen were indeed nothing but a genteel bourgeoisie 'reflecting' the views of her day, she would not be a great artist and she could not have written *Emma*. (p.101)

といっていますが、Kettle も Austen をたんにその時代のモラルをそのまま受けいれている gentle な作家であるという考え方に反対しています。

また Mary Lascelles は *Jane Austen and Her Art* (Oxford University Press, 1954) の中で、Austen の重要な技巧として 'self-effacement' (p.174) ということをお述べておられますが、このことを Harding の regulate という考えと結びつけることはいささか乱暴な話かもしれませんが、方向は真反対でも着眼点は相当近いところのように思われます。方向が真反対というのは、Harding の regulate は defence のためであり、消極的な、マイナス的なものでありますが、Lascelles の self-effacement は重要な技術の発展であり、たんにプラスどころか、これこそ作者の偉大さの証明であります。これほどまで真反対のものが同じ着眼点から生まれるところがまことに面白いところであります。

このような例をいくつあげてもきりがありませんが、最後にもう一つだけ、Virginia Woolf の Austen 論 ('Jane Austen' in *The Common Reader*, First Series, London, The Hogarth Press, 1951) の

一節をあげたいと思います。

... Thus at fifteen she had few illusions about other people and none about herself. Whatever she writes is finished and turned and set in its relation, not to the parsonage, but to the universe. She is impersonal; she is inscrutable. When the writer, Jane Austen, wrote down in the most remarkable sketch in the book a little of Lady Greville's conversation, there is no trace of anger at the snub which the clergyman's daughter, Jane Austen, once received. (p.171)

... For even if the pangs of outraged vanity, or the heat of moral wrath, urged us to improve away a world so full of spite, pettiness, and folly, the task is beyond our powers. People are like that — the girl of fifteen knew it; the mature woman proves it... The discrimination is so perfect, the satire so just, that, consistent though it is, it almost escapes our notice. No touch of pettiness, no hint of spite, rouse us from our contemplation. (p.177)

このように Woolf は Austen と anger, pangs, wrath, spite 等といったようなものと、無関係だとは考えていません。しかしそれらがまったく表面に現われていない、いや痕跡さえないというのです。何故なら憤りのために、世界の改善にむかおうともそれは我々の能力を越えているし、また彼女は個人的なところにとどまらず、全人類との関連

を見つめており、だから読者の観照をさまたげない偉大な作品を創りえたと考えるわけだからです。つまり、Woolf の anger - impersonal という図式は、Harding の hatred - regulated と対応するわけですが、もちろん Harding は hatred に力点を置いており、Woolf は impersonal に力点以上のものを置いているわけで、結局 Woolf の impersonal は Lascelles の self-effacement に連がつてゆくものであります。このように、両者は方向こそ偉え、Austen の同じような特徴に目をそそいでいると考えるのは、いささかこじつけじみているでしょうか。

さて、このような Woolf の Austen 論を説きますと、どうしても Richard Aldington の Austen 論 (*Jane Austen*, Pasadena, California, The Ampersand Press 1948) の一節を思い出さないわけにはいきません。

... Socially the girls from the rectory were on an equality with the girls from the manor house, and very probably better educated, with a finer moral sense. But from the all-important aspect of "fortune" they could not compete in matrimony with young ladies whose dowries ranged from ten to fifty thousand pounds. They must therefore marry a curate or half-pay officer or some ungentle tradesman or farmer with money or resign themselves, like Miss Austen to a life of celibacy. (p.7)

つまり、Austen のような牧師の娘は、社会的には一応 manor house の娘と同じであり、教育や道徳の面ではすぐれてさえいるにもかかわらず、財産の面でおとるために、一段と

低い身分のものと結婚するか、あるいは Austen 自身がそうであつたように独身生活をおくるかしなければならぬというのです。ここで、Woolf が「牧師の娘である Jane Austen がかつて受けたいんづくに対する憤りがない」といつている箇所との類似に注意してください。もちろん Aldington は「憤り」とはいつておりませんが、ともかくもこれを創作の動機と考えているようです。Woolf はその「憤り」を個人的なものから普遍的なものにしたためにその痕跡もないと考えましたが、Aldington は、そのようなものからの超越を、「Day dreams」である小説を書くことによつてなしたと考えています。

Day dreams are forbidden to nobody, and it is interesting to note that every one of Jane Austen's novels has a Cinderella in it ... (p.8)

つまり Austen の小説は「Day dreams」であり、その証拠に Cinderella が出てくるではないかという発想法であります。ところで Cinderella といえば、Harding 自身がこの言葉を使つていたわけであり、その使われかたにも類似の点なきにしもあらずと考えられます。いつてみれば、Aldington の場合は、牧師の娘という身分のために不当にとり扱われたことが hatred であり、Cinderella 的要素はそれが regulate されたものと考えられるからです。ただ Harding の場合、Cinderella 的テーマは regulate しえていないことの現われと考えられているふしがありその点では逆になります。

Austen の小説におけるおとぎ話的要素は例えば *Emma* の書き出し、'Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition...' また結びの、'the perfect happiness of the union.' を見ても明らかであるように、非常に目立つ

特徴でありますから、この点に言及している批評家が多いのも当然でありましょう。例えば、Sheila Kaye-Smith and G.B. Stern の *Talking of Jane Austen* (Cassell & Co. Ltd., 1950) の中で、'Cinderella-ish story'(p.7) といわれていますし、W.Somerset Maugham の *Ten Novels and Their Authors*, (William Heinemann Ltd, 1954) の中の次の言葉も結局同じようなことをいつているのだと思います。

... In *Pride and Prejudice*, the reader's satisfaction is considerably enhanced by the knowledge that the bridegroom has a substantial income and will take his bride to a fine house, surrounded by a park, and furnished throughout with expensive and elegant furniture. (P.64)

このように何人かの批評家が Austen の作品の中に Cinderella 的要素を認めているわけですが、一般的にいつておとぎ話というものの構造を考えてみますと、すくなくともその一つの型として、hatred 的なものがその底にあつて、それが幾重にも折れ曲がり、変形したものであるような気がしてならないのです。可愛らしい赤頭布が狼にたべられてしまふ話にしる、魔法によりみにくい蛙に姿を変えられ、恐怖を感じた王女により壁におつけられて、元の王子の姿にもどりハッピーエンドになる'蛙の王子'にしる、その底に hatred を感じないわけにはいきません。それはともかく、Austen のおとぎ話的要素は消極的な、ある意味では逃避的な 'Day dreams' 的な面とともに、hatred を regulate しながらも底に無気味に潜めさせている相当エネルギーのこもつた面、——それはまた容易に irony に転化するものでもありますが一 等々の面を含んでおります。

III

以上くどいくらいに沢山の批評家の言葉を引用してきた意図は、結局のところ Harding の Austen 論が非常に独創的で、突飛なものという印象を一読した時にはあたえがちであるにもかかわらず、それほど従来のものと離れたものではなく、孤立したものでもないということでありませう。しかしだからといって、Harding の hatred という言葉のあたえるショッキングなものや、その重点の置きかたの差異の重要性を無視しようとするつもりは毛頭ありませんが。つまり、Harding 自身がそのペーパーの末尾で、'a slightly different emphasis'(p.362) を提案しようとして試みたにすぎないといっている意味を考えれば、この Austen 論がそれほど従来の Austen 論と隔絶したところから飛びだしてきたものではないことは推察されうるのではないのでしょうか。R.W.Chapman が *Jane Austen, A Critical Bibliography*, second edition (Oxford, at the Clarendon Press, 1955) の中で、この 'Regulated Hatred' と、Mudrick の Austen 論と、Reuben A.Brower の 'The Controlling Hand: Jane Austen and *Pride and Prejudice*' (Scrutiny XIII, Sept.1945, 99.) の三つをひとまとめにして、

I group these essays in iconoclasm (they are grouped in Mr. Mudrick's preface) as seeming to issue from a common view, and that one with which I am so out of sympathy that I do not trust myself to discriminate.

(p.52)

といっていますが、偶像破壊者呼ばわりするほど居猛高にならなくてもよいようにも思うのです。Harding 自身が 'An Aspect' と表題でつつしみぶかく断つている通り、それはあくまでも一面にすぎないのです。しかも他の論者とまるで見合わないところでの発

言というわけでもないのです。つまり論文というもののありかたの少くとも一つとして、一応の妥当性は必要ですが、たんにその作品のバランスのとれた評価のみならず、この論文のように、一面を深く抉り取るという方法もあつていいのではないのでしょうか。今まで深く気にもとめられていなかった面を鮮やかに抉り出してみせる論文が次から次へと出る、そのことによりその作品なり作家なりがますます豊かに鑑賞認識されるようになるのではないのでしょうか。そういう意味でもこのHardingの論文は非常に意味のあるもののように思われます。しかも以上見てきたようにこの論文はたんに奇抜なアイディアによつて、人をアツと驚ろかせるものとして書かれたのではなく、従来の他の批評家の考え方とかみ合う点を持ち、その点からも妥当性がうかがわれるということでもあります。Wayne C. Boothが、*The Rhetoric of Fiction* (The University of Chicago Press, 1961) の中の *Emma* を論じている箇所
の脚註で次のようにいつています。

It has lately been fashionable to underplay the value of tenderness and good will in Jane Austen, in reaction to an earlier generation that overdid the picture of "gentle Jane." The trend seems to have begun in earnest with D.W.Harding's "Regulated Hatred: An Aspect of the Work of Jane Austen," *Scrutiny*, VIII (March, 1940), 346-62. While I do not feel as strongly aroused against this school of readers as does R.W.Chapman (see his *A Critical Bibliography*, p.52; and his review of Mudrick's work in the *T.L.S.* [September 19, 1952]), it seems to me that another swing of

the pendulum is called for : when Jane Austen praises the "relenting heart," she means that praise, though she is the same author who can lash the unrelenting heart with "regulated hatred." (pp.259-260)

つまり振子を右に左に益々大きく振らせること、それにより益々作品の鑑賞ないし批評は豊かになつてゆくのではないのでしょうか。振子の振幅を大にすることが、その振りかた、つまり総体的なバランスと妥当性ととも、批評家の重要な仕事ではないのでしょうか。